

教員には入学試験や定期試験での監督という仕事がある。試験開始前に問題と解答用紙を配り、試験中は気分が悪くなった生徒がいればその対応、また消しゴムやシャーペンを落とした生徒がいれば拾って渡し、試験終了とともに答案の回収・確認というのが一連の流れだ。

ほとんどの試験ではこの時間中は何事も起こらないし、起こって欲しくない。「楽でいいね」と言われそうだが、実は何もすることがない程疲れることはない。何もしゃべらずに眼だけ動かして同じ姿勢でいると、体が固まってしまいそうになったり、睡魔に襲われたりする。そういう時は思いつきり体を動かしたくないが、試験中のこと故、腕を振り回したり教室内を何度もぐるぐる歩き回ったりすることもできない。せいぜい試験の邪魔にならないように、静かに机間を巡ったり教卓で立ったり座ったりするだけだ。

ところで、試験監督が一番神経を使う入学試験で、監督はなぜ気づかなかつたのだろうか。過去に京都大学の入学試験で、数学の問題をスマホに入力してネット掲示板の読者に解答を求めたことを。また、今年の大学入学共通テストで上着の袖に隠したスマホで設問を写して、家庭教師に解いてもらおうとしたことを。そんなことが起こるとは思ってもみなかったから？

中国では六世紀末から二十世紀初めまで、役人になるためには「科挙」という試験に合格しなければならなかった。白髪の老人になるまで何回受験しても合格できない人も多くいた。この試験は三年に一度行われ、合格者は千人に一人という狭き門だった。受験生は食料を持参し、トイレの個室くらいの広さの小部屋に三日二晩缶詰になって問題と格闘した。合格するためには富裕な親の下に生まれ、幼少のころから勉強して、膨大な量の経典を暗記しなければならず、従ってカンニングに助けを求める受験生もいた。下着の裏表に教典をびっしり書いた「カンニング下着」が涙ぐましい努力の証拠として残っている。

この試験の監督はどのような罰を受けたのだろうか、気になる。